3）福島尚純著「袖珍外科總論」

"Handbook of General Surgery" Written by Y. Fukushima

日本大学松戸歯学部　○山口　秀紀
大場　重信
村木　春長
谷津　三雄
医歯薬出版株式会社　今田　喬士

Hidenori Yamaguchi, Shigenobu Ohba, Harunaga Muraki and Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo
Takashi Imada, Ishiyaku Publishers, Inc.

今田見信編，「続歯学史料アルバムところどころ」3（67）に「福島尚純は福岡の黒田藩の藩医の家に生れ，東京帝国大学医学部を明治38年に卒業され，佐藤（三吉）外科に入り助手，講師を永年やられていた．東京大学在職中に「外科総論」や「牙関緊急」の名著がある．また大正5年頃には「口腔外科」上，下2巻の名著も出版された．その東京歯科医学専門学校の口腔外科学の教授であって，内外に名声も高かった．昭和時代になってから出版された「女性と口腔歯牙」「黴毒と口腔歯牙」などの貴重な著書は私も（注：今田見信先生）販売に一役つとめたが，ひろく愛読されたものだ．関東大震災の直前，高山紀斎の銀座診療所を譲受けて福島医院（口腔外科，歯科併設）を開かれたが，大震災の為烏有に帰してからは，小石川鴛籠町に医院を再開され，昭和7年末頃に小石川原町に新しく，近代設備をととのえた病院を建築されたが，移転されたばかりで病床の身となられ，東大塩田外科に入院手術されたが，遂に薬石効なく惜しくも逝去された．病気は胃癌であったと記憶する．昭和8年4月4日没せられた．福島博士は島峯徹博士と同期の東大卒業であるが，両先生は深く交友することもなく，お互いに別々な道を歩んでいかれたというエピソードを残されたまま他界された．ともあれお二人ともわが国歯学に貢献された業績には貴重なものがあって面白いと思う」と記されている．

そのうち，第15回（昭和62年度）本学会において吉村は福島尚純編，近世医学叢書，第拾壱編，下顎関節炎及牙関緊急（明治42年11月3日発行，南江堂）を資料とし，その内容を報告した．また，第16回（昭和63年）本学会において森山らは『福島尚純著「臨床口腔外科講義集」第Ⅰ輯，第Ⅱ輯および「歯科外科学全」の書誌学』と『「口腔外科学第一・第二巻」およびその後の著書の書誌学』について報告し，「女性と口腔歯牙」（大正14年1月1日刊），「抜歯創の合理的処置」（昭和3年7月刊）「黴毒と口腔歯牙第一」（昭和5年1月刊）など，東京歯科大学図書館の蔵本をもとに報告した．また，その人物史について「福岡県黒田藩々医の家に生れ，明治38年東京帝国大学医学部を卒業，佐藤三吉教授の下で外科を専攻した．東大在職中に「外科総論」「下顎関節炎及牙関緊急」等を著した．…福島は明治40年，東京歯科医学専門学校に講師として招聘せられて口腔外科学を講じ，云々」とある．

そこで今田見信先生旧蔵本，医学士福島尚純纂著「袖珍外科総論全」東京，南山堂発行，大正元年9月4日刊の内容を述べ口腔外科史の一端としたい．

本書は 11.5×15.5 cm 大，全466ページでまさに袖珍の名にふさわしい．自序に「近時医学ノ進歩ハ愈々精ニ愈々微ニ吾人ヲ駆リテ偏ニ分科的研究ニ没頭セシメントス．然レドモ臨床医学ノ方面ニ於ケル各分科ハ，我外科学ニ胚胎スルモノ最モ多ク，眼科，産科，婦人科，皮膚病黴毒科，泌尿生殖器科及耳鼻咽喉科ノ如キ何レモ之ナリ，歯科学モ亦近来著シキ接触ヲ示シ外科学ノ智識ヲ要スルコト極メテ多キニ至レリ．然ラバ外科ハ各分科ノ母学ト称スルモ不可ナラザル可ク，従テ外科学ノ基礎タル外科学総論ガ医学上如何ナル位置ニ在ルカ亦多言ヲ要セザル可キナリ．…多クハ浩瀚ニシテ多忙ナル臨牀家ガ刹那ノ繙閲ニ便ナラズ，或ハ学生ヲシテ一読克ク全意義ヲ捕捉セシムルニ困難ナルヲ免レズ，サレバ若シ比較的小冊子ニシテ，加之，最近学術ノ進行ニ伴随セル著書アランカ，誠ニ時代要求ノ一部ヲ充スヲ得ルモノト

云フベキナリ．云々」から，本書出版の意図を知る．目次の大項目から本書の内容をみると「第一編　防腐法及麻酔(1～48)，第二編　創傷論(49～91)，第三編　創傷伝染及外科的伝染疾患（92～202)，第四編　損傷及壊疽（203～276)，第五編　伝染及腫瘍外ノ重要ナル外科的疾病（277～332)，第六編　腫瘍論(333～453)，第七編　嚢腫(454～466）である．尚，明治40年代の外科総論のベストセラーは桂秀馬著で全三冊の大著であった．

4）長野県諏訪の入歯師

The Denturist in Suwa

新藤　恵久
長谷川　弥

Shindo Yoshihisa, Hasegawa Hisashi

諏訪郡川岸村には，二代にわたる口中医・入歯師の鮎沢弥平がいたがこの度二代弥平の資料が発見された．彼の道具箱には木床義歯製作の道具とともに二代目入歯師弥平について孫鶴重が祖父について記した略歴が入っていた．

「歯の治療をなせしは祖父弥平及曽祖父弥平の二代にして既に古い時代にて詳かならず古老の言に依るも曽祖父時代に関しては全く知る者もなく祖父弥平時代の事を僅に知るのみなり，祖父弥平の万事に器用なりしことは世間のよく知るところ歯の治療に就いても又曽祖父より習得すると言ふよりも自己の器用により一般治療をなし近郷の患者は勿論のこと数日或は十数日を費し遠きは松本地方より伊那地方迄も出張し診療に従事したが諏訪藩に仕へ後補長となる等にて専心研究する事を得ざりしも世の人々に非常に歓迎され重宝がられしと言ふ，当時上諏訪町に，たつみ屋といふ有名な歯医者があり祖父も時々其家に行ったことがありゴムの入歯が出来ると言って非常に羨ましかったとの事で明治三十八年五月七十四才を以て死去する迄人々の需めに応じ診療せしと云ふ

昭和十一年六月　　川岸村　鮎沢鶴重」

同年この資料は長野県諏訪郡川岸村の歯科医・浦野五郎雄により日本歯科医学専門学校に寄贈されたがその後その所在が不明であったが今回発見されたので報告する．

5）水窪のツゲ

Tsuge-Box-tree-in Misakubo

小沢　亨司
新藤　恵久

Ozawa Teiji, Shindo Yoshihisa

水窪は昔，奥の山の郷と呼ばれ，静岡県の西北端に位置し，南は赤石山脈西端に，北は長野県，西は愛知県に接する，広大な地域で，96%が山林である．

長野県諏訪湖付近から南下する地質学上有名な中部構造線が，水窪川支流の翁川とほぼ平行に南北に走り，これがかっての「塩の道」と呼ばれた信州と遠州を結ぶ唯一の交通路で，その昔，中部山岳地帯の人達が山を踏み越え南下したり，南の海辺の人々が北へ上っていった．この旅人や山の幸，海の幸を載せた馬，駄賃背負の宿場町として栄えたのが水窪である．永禄7年（1564）には，市神が奉られ月六度の市が開かれている．

この町は，中尾根山（2,296 m）を頂点とする2,000 m級の山嶺が続き，市街地の標高 250 m，この標高差から生まれたのが四季の変化と動植物の分布の多様性であり，三方を山で囲まれた地形は，温暖多雨の気象条件となり，古くから水窪杉と呼ばれる一大天然美林地帯を現出した．

ツゲ自生地は，現在山王峡と呼ばれる峡谷の白倉川の両岸に迫る135 m級の岩山の岩肌にある．ここのツゲが木床義歯に使われたのは，当地の気象とその自生地の厳しい環境により材質が緻密であるためと考えられる．

現在まで判明しているこの地のツゲを使っていた入歯師は，駿府の浮田幸吉と貞兵衛，貞太郎親子，諏訪の鮎沢弥平である．かれらはこの地に泊まりがけでツゲ材を買いにきている．